

紀貫之土佐國ヨリ上テ行テ見ケルニ、哀也ケレバ讀ケル、

キミマサテ煙タエニシ鹽ガマノウラサビシクモミエワタルカナ、ト此院ハ陸奥國ノ鹽竈ノ様ヲ造テ、潮ノ水ヲ湛ヘ汲ミ入レタリケレバ、此ク讀ナルベシ、

〔顯注密勸^{十六}〕君まさで烟たえにし鹽がまの浦さびしくも見え渡る哉

これは河原左大臣融源の六條河原にのみじき家作て、池をほり水をた、へて、うしほ毎月に三十石まで入て、海底の魚貝等をすましめたり、陸奥國のしほがまの浦をうつして、あまの鹽屋に烟をた、せて、もてあそばれけるに後、おと、うせられて後鹽がまの烟たえたるをみて、貫之のぬしよめる歌也、

〔東遊記^二〕鹽竈

奥州仙臺の東北四五里に鹽竈といふ町あり、鹽竈明神を祭る地故其所の名とす、甚繁花の地にて、家數も千軒に餘り、略○中神代の釜とて玉垣ゆひ廻して、其中に釜四ツを並べたり、是を見るに誠に希代の神物也、釜の内皆各潮水を貯ふ、其潮の色赤きあり青きあり紫あり、四ツの釜皆潮水の色を異にす、鹽水ゆゑに此釜の鐵氣出で、水の色を變ずるにや、毎年七月十日早曉、社人齋戒沐浴して此潮を汲替る事也、此釜は神物ゆゑに、何事にもせよ、此國に變異ある時は、此釜の中の水色、たちまちに變じて奇色をあらはす、往古より毎々しるしありといふ、釜の大きさわたり四尺餘、深さ纔に貳三寸、或は四五寸に不過、皆少しツ、の大小淺深ありて、四ツとも同じからず、皆甚淺くして足無く鏝無く、其形たとへば家々常に用ゆる所の丸盆のごとし、全體鐵にて作りたるものにて、其厚さ三寸計もあり、不相應に厚きもの也、實に神代の舊物にして、五百年千年の物にはあらず、傳へ云、鹽竈明神上古の世、此地に降臨まし、て初て、此釜を鑄給ひ、海潮を煮て鹽を取ることを人民に教給ふ、今に至るまで、天下鹽を食ふ事を得て、明神の徳を蒙る、今に其時の釜